

分断化された権威主義体制における土地権利紛争の行政と司法の関係
——「内モンゴルビル」案件を事例として——

要旨

本稿は、分断化された権威主義体制における行政・司法関係の実態を、中国の「内モンゴルビル」案件を通じて分析することを目的とする。土地権利をめぐる本件は、内モンゴル自治区政府と深セン市政府という異なる行政レベル、ならびに複数階層の法院（基層・中級・高級・最高）が関与し、管轄権の重複と制度的摩擦が露呈した典型例である。

本研究は、中国裁判文書網に掲載された関連判決・裁定書をもとに、当事者間の法的主張・行政行為・司法判断の連関を時系列的に整理し、制度的分断と統合のメカニズムを明らかにする。特に、権威主義体制において司法が政治的・行政的圧力の下でいかに中立性を保とうとするか、また制度的制約の中でどのような応答行動をとるのかに焦点を当てる。

本稿は、司法の制度的限界を前提としつつも、その動態的実践において法的正当性の構築や行政行為の是正がどのように試みられているかを示し、権威主義体制下のガバナンスにおける司法の可能性と限界に関する理論的議論への一助を目指す。